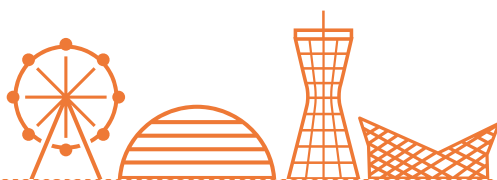


地域支え合い活動推進事業

第1層生活支援コーディネーター

活動事例集



はじめに

神戸市では平成27年度より第1層(区圏域)の生活支援コーディネーターを各区社会福祉協議会(以下、「区社協」)に配置し、地域住民や関係機関との連携のもと、「地域支え合い活動推進事業」を実施し、生活支援・介護予防の推進や支え合い活動ができる地域づくりに取り組んでいます。

本事例集は、地域活動の様々な事例を通じて、生活支援コーディネーターが行う地域支援のプロセスや取り組みを見える化し、地域住民や関係機関との今後のさらなる連携につなげることを目的に各区社協の生活支援コーディネーターとともに作成しました。資源開発の取り組みを進めるための地域活動のノウハウの共有等にもご活用いただけます。

事例集により第1層生活支援コーディネーターの活動を知っていただき、今後の連携や支え合いの地域づくりの推進につながりましたら幸いです。

01

はじめに

はじめに	2
用語解説	2

02

地域支え合い活動推進事業の概要

事業内容と生活支援コーディネーターの配置	3
生活支援コーディネーターの取り組み実績(平成30年度)	3
生活支援コーディネーターの1週間	4

03

活動事例一覧

01 単身高齢者が多い地域における地域資源を活用した居場所立ち上げ支援(兵庫区)	5
02 ふれあい喫茶をはじめよう！～新たな地縁づくり～(垂水区)	7
03 高齢者福祉施設や喫茶店を活用した集い場づくり(北区)	9
04 ふれあい喫茶スタンプラリーの実施(兵庫区)	11
05 「農福連携」を活かした買い物ができる集い場づくり(北区)	13
06 集合住宅内における生活支援のしくみづくり(東灘区)	15
07 地域での生活支援活動をすすめるための事例集作成(垂水区)	17
08 子ども向け認知症啓発プログラム「キッズ認知症サポーター養成講座」(灘区)	19
09 金融機関向け認知症サポーター養成講座の開催(北区(北神))	21
10 シニア世代(特に男性)の地域参加に向けたネットワークづくり(西区)	23
11 シニア向けはじめの一步ツアー開催に向けての取り組み(兵庫区)	25
12 高齢者への支援の仕組み構築に向けた支援者用ツールづくり(中央区)	27
13 体操で地域まるごと元気に！～多職種連携による地域支援～(西区)	29
14 ふれあい給食会活動の取り組み(長田区)	31
15 友愛訪問活動の取り組み(須磨区・兵庫区・西区)	33
16 フォーラム・サミットの実施(兵庫区・垂水区・西区)	37

04

神戸市・各区社会福祉協議会一覧

神戸市・各区社会福祉協議会一覧

用語解説

第1層生活支援コーディネーター

高齢者の生活支援・介護予防の基盤整備の推進、地域での支え合い活動ができる地域づくりを目的に第1層(＝区圏域)に配置。

※本事例集における「生活支援コーディネーター」は第1層配置の生活支援コーディネーターを指す。

民生委員・児童委員

民生委員法等に基づき、厚生労働大臣により委嘱を受けた地域ボランティア。地域住民の立場から生活や福祉全般に関する相談支援等を行う。

※本事例集では「民生委員」と表記。

友愛訪問活動ボランティア

ひとりぐらし高齢者等を週1回程度訪問し、安否確認・話し相手等の活動を行うボランティア。

ふれあい給食会

ひとりぐらし高齢者等を対象に地域の福祉活動団体やボランティアグループが月1～2回実施する給食サービス。

生活支援・介護予防サポーター

神戸市が事業者に委託して実施している住民参加型サービスの担い手の養成と地域で高齢者を支える活動の創出を目的とした研修の修了生。

あんしんすこやかセンター(地域包括支援センター)

高齢者の介護や見守りに関する総合相談窓口。中学校区に1ヶ所。地域支え合い推進員が配置され、第2層生活支援コーディネーターとして位置づけられている。

地域ケア会議

高齢者が住み慣れた地域でいつまでも暮らし続けられるように、一人では解決できない困りごとを地域みんなで解決するための話し合いの場。

●神戸市の地域ケア会議の体系

地域レベル(第2層)、区レベル(第1層)、市レベルの地域ケア会議があり、2層で話し合われた課題のうち区全体の課題を1層で整理し、市レベルの地域ケア会議で政策形成につなげる話し合いを行う。1層で整理された課題を具体的に話し合ったり、資源開発をするために区社協が開催する協議体機能を有する会議(実務者会)がある。

認知症サポーター養成講座

認知症の症状や認知症の方への接し方を学ぶ、認知症について正しく理解するための市民向け研修。「キャラバン・メイト」は講座の講師。

地域支え合い活動推進事業の概要

事業内容と生活支援コーディネーターの配置

神戸市では高齢者が住み慣れたまちで安心して暮らせるように、見守りをはじめとした介護予防と生活支援の推進を図るとともに、地域住民同士での支え合い活動ができるコミュニティづくりを目的とした「地域支え合い活動推進事業」を実施し、民生委員・児童委員や地域のボランティア、関係機関と連携して地域支え合い活動を全市的に展開しています。

神戸市では全国に先駆けて、各区社協に「地域福祉活動コーディネーター」、あんしんすこやかセンターに「見守り推進員」を配置し、民生委員・児童委員を中心に地域の見守り活動を展開してきました。この活動を軸として展開されてきたコミュニティづくりが基盤となり、現在も

様々な住民主体の活動が広がっています。

平成27年度の介護保険法改正にともない、神戸市では、従来の「見守り推進員」が「地域支え合い推進員」として、第2層(中学校圏域)生活支援コーディネーターに位置づけられました。また、「地域福祉活動コーディネーター」は市社協が市から委託を受け、介護予防と生活支援の基盤整備を進めるために、第1層(区圏域)の「生活支援コーディネーター」として各区社協に配置することになりました。

地域見守り活動など、広く地域活動を支援している区社協に配置されている生活支援コーディネーターとしての強みを活かして地域支援を行っています。

生活支援コーディネーターの取り組み実績(平成30年度)

生活支援コーディネーターが地域住民・地域団体やあんしんすこやかセンターと連携した主な内容と、そこから見える生活支援コーディネーターの役割の一部についてご紹介します。

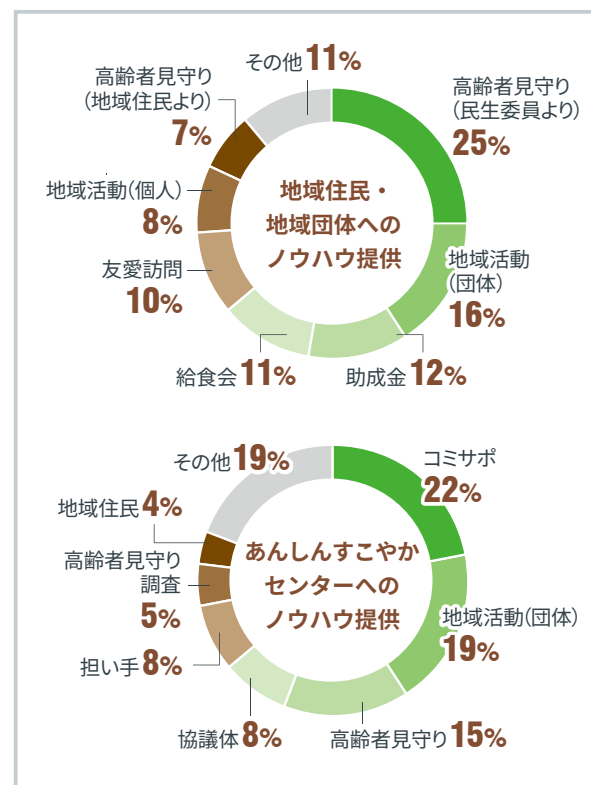
Ⅰ 地域住民・地域団体との連携

全市で年間7,517件、地域住民・地域団体からの相談対応及び連携を行いました。生活支援コーディネーターによるノウハウの提供は、高齢者見守りに関することが最も大きな割合を占め、続いてグループによる地域活動、助成金、ふれあい給食会に関することが多く見られました。すでに活動しているグループの継続・維持、活動の拡充や、地域住民の不安や活動したい気持ちに寄り添った支援を行い、資源開発につなげています。

Ⅱ あんしんすこやかセンターとの連携

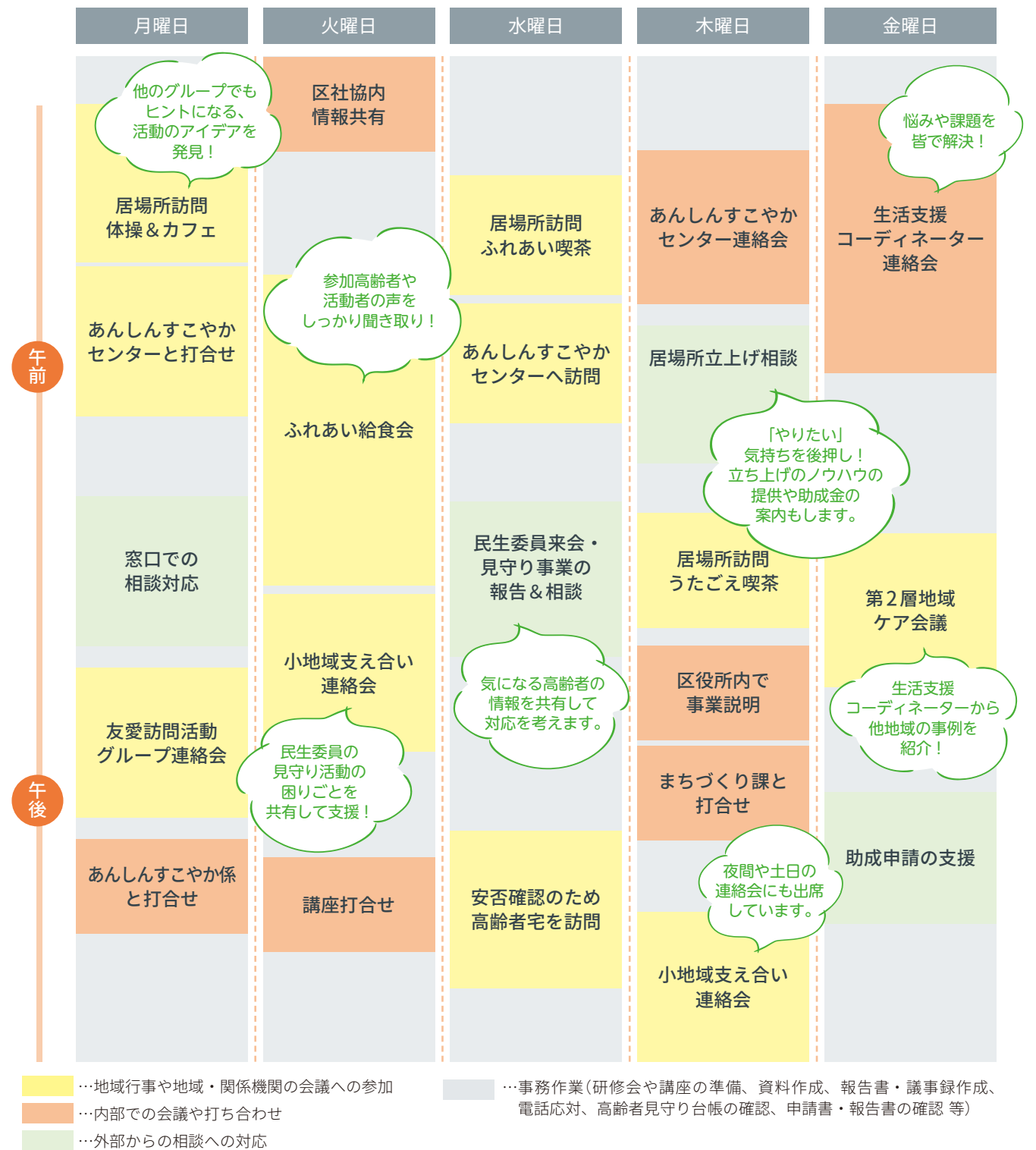
全市で年間6,926件、あんしんすこやかセンターとの相談対応や関係機関との連携を行いました。コミュニティサポートグループ育成支援事業(※)に関するノウハウの提供が最も多く、次いでグループによる地域活動、高齢者見守りに関することと続き、この3項目で約6割を占めています。住民主体の支え合い活動について生活支援コーディネーターとあんしんすこやかセンターがともに連携をしながら取り組んでいることが分かります。

※コミュニティサポートグループ育成支援事業
地域住民主体で地域貢献やコミュニティづくり、介護予防に資する活動を行うグループの結成・育成支援を行う。
右グラフでは「コミサポ」と表記。



生活支援コーディネーターの1週間

日々、地域に出向いて活動支援をしたり、区社協内で地域活動者や関係機関からの相談に窓口や電話で対応している生活支援コーディネーターの1週間の行動を見える化しました。土日に地域活動や地域の会議へ参加することもあり、地域支え合い活動の推進に取り組んでいます。



単身高齢者が多い地域における 地域資源を活用した居場所立ち上げ支援



地域の概要

高齢化が進み、単身世帯が増えている。地域には大きな小売市場があり、貸しスペースもある。

取り組みのきっかけ

第2層地域ケア会議において、地域に高齢者が気軽に集い、話をしたり生きがいづくりにつながる場所がないという心配の声があがった。この地域は高齢化が進み、単身高齢者が増え、身近な場所・人とのつながりの機会が減少している問題もある。ボランティアから「ふれあい喫茶（ふ

れあいサロン）が立ち上げられたらいい」と意見があがったが、高齢のボランティアが多く、自分たちで立ち上げや運営は難しいという問題があり、あんしんすこやかセンターへの支援として区社協の関わりを開始することとなった。

キーワード

- ☑ 地域の単身高齢者が増え、孤立する人がある
- ☑ 地域の高齢者が気軽に集える場所がない
- ☑ ボランティアの高齢化

地域の資源を活用した高齢者が集える「ふれあい喫茶」の立ち上げ

方向性

- ☑ 地域のあらゆる資源（人・物）を意識し、常に課題を発信
- ☑ 提案とつなぎ（マッチング）、黒子的支援を行う
- ☑ より行きたい居場所、居心地の良い居場所を目指す

立ち上げのプロセス

全体の流れ

STEP 1

地域の状況と住民の要望

第2層地域ケア会議が開催され、メンバーとして出席。高齢化している地域で、つどい場のない地域にふれあい喫茶の立ち上げができればいいなという意見が出た。

STEP 2

中心メンバー募集と会場探し

地域のお世話役は高齢で自信がないと言われる。協力者が不足しており、メンバーをどう募るか検討。また、地域には貸室や空きスペースがほとんどない状況であり、会場探しをどうするかも検討した。

STEP 3

居心地の良い居場所づくり

お世話役のメンバーにより良い居場所をつくるために、使用する食器やコーヒーなどの飲み物や茶菓子のチョイスについて意見出しをしていただき、一緒に検討。

STEP 4

ふれあい喫茶をオープンする

チラシを作成し、あんしんすこやかセンターが中心になって、地域の民生委員やボランティア、関係機関から地域住民へ案内を実施。

STEP 5

地域の資源と居場所をつなぐ

地域の病院から健康講座や身体測定実施の申し入れがあり、居場所へ情報提供を行い、実施につなげる。

生活支援コーディネーターの視点

生活支援コーディネーターは、地域で生活しておられる住民の方々の思いを聞くことが大切。地域の声をよく聞き、一緒になって、住民の方々のペースで進めた。

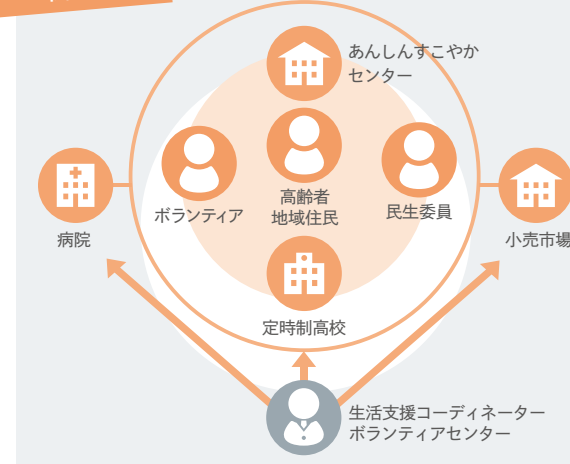
ボランティアセンターとも連携し、人材探しを行う。また、あんしんすこやかセンターとともに、新たな人材の発掘を行う。近隣の定時制高校の生徒さんの継続的な活動協力をお願いする。会場探しでは、地域をよく知るあんしんすこやかセンターに全面的にゆだねる（役割分担）。地域をいろいろとたずねていただき、大きな小売市場の空きスペースを借りることができた。

メンバーの生の声が大切。ふれあい喫茶オープンに向けての打ち合わせを行う。メンバーの視点から、食器は本物を使用（使い捨てではなく、陶器を使用）。コーヒーはインスタントではなく、粉からたてて、いい匂いで誘い込もうなど、意見が次々に出された。

会場がある小売市場を大切にしたいと思い、今後お世話になる小売市場の店舗の方々にあいさつ回りをすることを提案し、あんしんすこやかセンターと一緒に行動した。

常日頃から、掛け算を意識して行動する。地域の資源を組み合わせることで、居場所に活気が出たり、豊かになったりする。

関係図



取り組みの到達点

月1回、1～2名のボランティアとあんしんすこやかセンターが活動を継続中。民生委員にも協力いただいている。高齢者が毎回20人程度参加し、だれでも自由に来ることができる居場所となっている。小売市場や医療関係者とも良好な関係づくりができた。

今後に向けて

地域に根差した新たな担い手の募集を継続的に行うことや、小売市場の方々へのメリットになることを考えていきたいと思う。また、医療関係者と今後もつながり続けられるように考えていく。

生活支援コーディネーターのひとこと

広い視野を持って地域に出向き、課題と資源は新鮮なうちに結び付けることを心がけた。地域の声をよく聞き、その提案を取り入れ、自主的な活動につなぎ、一緒に進めていくことが大切だと感じた。

ふれあい喫茶をはじめよう！ ～新たな地縁づくり～



地域の概要

戸建て住宅、県営住宅、URから構成される地域。戸建・県住では高齢化が進んでおり、URは近所づきあいが少ない。また、自治会・婦人会等の地縁組織がなくなっている。

取り組みのきっかけ

この地域で開催されていたふれあい給食会が、ボランティアの高齢化のため休止することになった。給食会を楽しみにしている高齢者のため、ボランティアの負担が少ない運営方法が模索されたが、主たるメンバーの意思は固く、新たなボランティアを得て再開したいという願いを

込めて「休止」という形になった。同じ頃、健康体操グループも活動を終了し、つどいの場がさらに減った。地域福祉センターではサークル活動は行われているが、誰でも気軽に立ち寄れる場にはなっておらず、センターを十分に活用できていない。

キーワード

- ☑ 地縁組織が少なく、地域住民のつながりが希薄
- ☑ 高齢者が気軽に集まれるつどいの場がなくなった
- ☑ 地域では同じ人が様々な役割を担っていて手いっぱいである

新たな担い手による「ふれあい喫茶」を立ち上げたい

方向性

- ☑ 地域活動の新たな担い手探し
- ☑ 負担感がない活動スタイルをつくる
- ☑ いずれはふれあい給食会を再開したい

立ち上げのプロセス

全体の流れ

STEP / 1

ワークショップを開催

ふれあいのまちづくり協議会役員や民生委員、あんしんすこやかセンター等に参加いただき、地域の強み・弱みを話し合い、取り組みのアイデアを出し合った。

STEP / 2

地域ケア会議で検討

ワークショップの内容をもとに第2層地域ケア会議で具体的な取り組みについて話し合った。無理せず、小規模なことならできるのではという意見が出た。

STEP / 3

地域限定のボランティア講座を開催

担い手探しを目的として区社協とふれあいのまちづくり協議会の共催で地域限定のボランティア講座を開催した。

STEP / 4

ふれあい喫茶にトライ

地域ボランティア講座の参加者に加え、ボランティアセンター登録者や生活支援・介護予防サポーター登録者にも声をかけ、試行的にふれあい喫茶を開催した。

STEP / 5

新たな地縁をつくる

ふれあいのまちづくり協議会の委員長が中心となり、今回出会った方々でふれあい喫茶を立ち上げた。

生活支援コーディネーターの視点

ふれあい給食会が休止となり、つどいの場が減ったことを地域関係者と共通理解し、一緒に“地域の宝物”を探したかった。

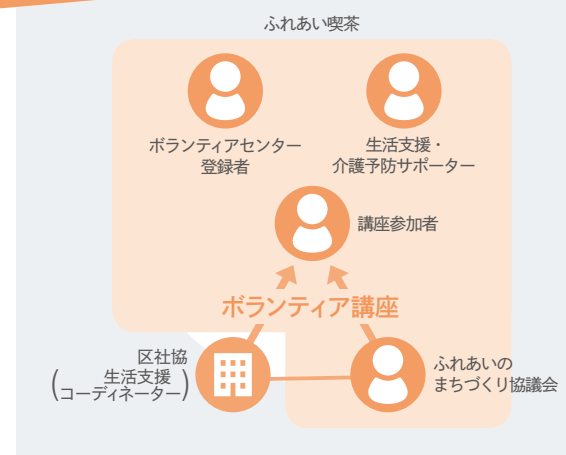
現在、地域で様々な役割を担っている方が参加者であったため「“手伝い”はできるが、“中心”にはなりたくない」という雰囲気があった。改めて、新たな担い手を探す必要を感じた。

堅苦しくならないよう内容を工夫したつもりだったが、講座の参加者は実質4人。チラシを配布するだけでは効果がなかった。

地域内に住むボランティアセンター登録者や生活支援・介護予防サポーター登録者に電話で趣旨を説明して誘ったところ参加者が11人に増えた。直接声をかけることの効果を実感した。実際に体験してもらうことでハードルが下がり、活動の立ち上げにつながった。

新たに出会った方々が「チーム」になるには時間がかかるため、生活支援コーディネーターが関わりを続け、少しずつ役割分担等を助言している。

関係図



取り組みの到達点

ふれあいのまちづくり協議会をはじめとする地域の方々や関係機関と話し合い、新たなつどいの場の実現に向けて協力することができた。また、ボランティア講座を開催したり登録者に声をかけたりと、区社協の強みを活かして新たな担い手を探し出すことができた。

今後に向けて

今回出会った方々が新たなグループとして自立し、ふれあい喫茶の延長線上で、無理なく給食会が再開できるよう支援する。

生活支援コーディネーターのひとこと

ふれあい給食会に参加されていた高齢者の新たな居場所づくりのために、地域福祉センターを活用したつどいの場づくりを模索した。地域住民の意見を尊重しつつ、サポートしながら伴走中である。

高齢者福祉施設や喫茶店を活用した集い場づくり



地域の概要

住宅街・商業地の混合地域で、駅を中心にしたすり鉢状の地形であり、住宅地に向かって坂道が続いている。高齢化率は市内平均より高い。

取り組みのきっかけ

第2層地域ケア会議等において、高齢者福祉施設や喫茶店から「空きスペースを地域の集い場として活用してほしい」と会場提供の申し出があった。また、会議に出席

した地域住民からは「ボランティアとして活動しますよ」という声もあがったため、これらの会場を活用した集い場づくりに取り組むこととなった。

キーワード

- ☑ それぞれの集い場までの距離が遠く、坂道も多い
- ☑ 集い場づくりの担い手不足
- ☑ 地域資源の活用

歩いて行くことのできる距離に多くの集い場(ふれあい喫茶)を立ち上げたい！

方向性

- ☑ 協力してもらえるボランティアを見つける
- ☑ 会場提供者とボランティアとの調整
- ☑ ボランティアの不安・負担感のないような運営

立ち上げのプロセス

全体の流れ

\ STEP / 1

会場提供者の意向確認

会場提供者とあんしんすこやかセンターとともに、集い場の立ち上げに向けて打合せを行う。会場の提供条件、使用ルール等の確認。

\ STEP / 2

集い場運営ボランティアの募集

ボランティア募集のチラシを作成し、民生委員の会議や地域ケア会議等でボランティア募集を周知。いろいろな地区から8人の応募があった。

\ STEP / 3

立ち上げに向けての打合せ

集い場立ち上げ検討会を会場予定施設にて開催。立ち上げに向けて開催日時や必要物品などについて打合せを行った。区社協からは助成金や他地区の情報を提供。

\ STEP / 4

リハーサル実施

ボランティアのみでリハーサルを実施。当日の動きや役割分担、不足している物品等について確認。区社協やあんしんすこやかセンター職員が参加者役となり、実際にお茶出しから片付けまでを行った。

\ STEP / 5

ふれあい喫茶開催

開催当日に反省会・打合せを行い、その回ごとに課題や良かった点を共有。

生活支援コーディネーターの視点

会場提供者と集い場のイメージを共有し、今後の進め方と役割分担を確認した。

担い手確保については、圏域や既存ルートにこだわらず、あんしんすこやかセンターが中心となり、地域の役職を退任される予定の方や新たな活動を始めてみたい方へも呼びかけを行った。

会場提供者と運営ボランティアの認識にズレが生じないように、運営方法を1つ1つ一緒に取り決め、ボランティアが不安なく活動できるよう調整を行った。

参加者やボランティアの導線がスムーズな役割分担がうまくいっているかなど当日の動きの確認。

ボランティアのチームワークが円滑に進むよう心がけ、活動が負担とならないよう、一人ひとりへの声かけなどを行った。

関係図



取り組みの到達点

一般的な地域の集い場のイメージである地域福祉センターや自治会館以外の場所の活用ができた。日頃は集い場の参加者だった方がボランティアとして参加され、多くの参加者が来られることでやりがいを感じ、やって良かったとの声を聞くことができた。

今後に向けて

提供された会場を地域資源として最大限活用できるよう、オープンカフェや流しそうめん等のイベント開催もボランティアに提案したが、まだ運営に慣れておらず、実施には至らなかった。今後、タイミングを見計らって再提案していきたい。

生活支援コーディネーターのひとこと

福祉施設や店舗を集い場として活用することで住民からの認知度が上がり、福祉施設を身近に感じたり、商店のにぎわいづくりに貢献できたり、地域のつながりを広げることができた。

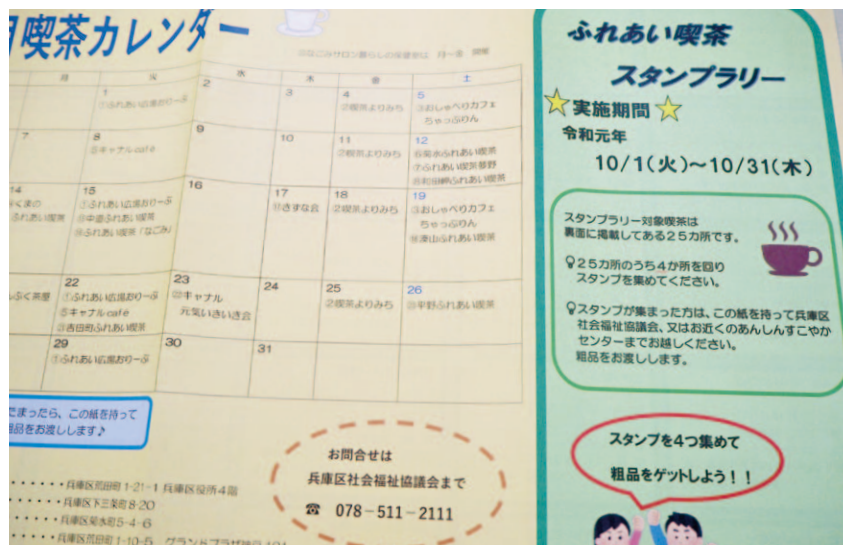
活動事例

04

居場所

兵庫区

ふれあい喫茶スタンプラリーの実施



地域の概要

兵庫区は南北に長く北部は坂も多い。東西にはJR、山陽電車、地下鉄が走っており移動しやすいが、南北の交通手段は神戸電鉄とバスしかない。高齢化率も高い数値となっている。

取り組みのきっかけ

地域での高齢者の課題を把握する中で、高齢者が毎日外出するきっかけが必要だと感じ、初めてでも参加しやすいであろう「ふれあい喫茶」に足を運んでもらうきっかけづくりとして「ふれあい喫茶スタンプラリー」を企画した。家の近くだけでなく他の圏域の喫茶も訪ねることで新た

なつながりを作ることができ、出歩くこと(＝運動)による介護予防も期待できると思われた。また、高齢者に限らず若い世代にも喫茶に参加してもらいやすい仕組みを作ることで、居場所の次の担い手の発掘にもつながると考えた。

キーワード

- ☑ 高齢者が毎日外出するきっかけを作りたい
- ☑ 居場所の次の担い手を発掘したい
- ☑ 家の近くだけでなく、他圏域へも出向いてほしい

兵庫区内ふれあい喫茶スタンプラリーを企画！！

方向性

- ☑ ふれあい喫茶運営者の把握
- ☑ 見やすく、分かりやすいパンフレットの作成

立ち上げのプロセス

全体の流れ

生活支援コーディネーターの視点

\STEP/
1

実施への準備

あんしんすこやかセンターの協力を得て、区内のふれあい喫茶及び喫茶の代表者を把握。また、スタンプを集めた方への粗品のお渡しをあんしんすこやかセンターへ協力依頼。

スタンプラリー参加者が粗品を受け取りにあんしんすこやかセンターへ行くことで、**あんしんすこやかセンターと地域住民との顔つなぎにもなる**と考えた。

\STEP/
2

実施場所(喫茶)への協力依頼

区内のふれあい喫茶へスタンプラリーへの参加を呼びかけ。

スタンプラリー対象喫茶としての参加の可否だけでなく、**周知のみ可能な喫茶も募った**。

\STEP/
3

宣伝・告知の準備

スタンプラリー対象喫茶を確定させ、各喫茶の情報をまとめたパンフレットを作成。

情報をまとめるだけでなく、**開催日をカレンダーに落とし込み**、一覧にして見やすい形式で作成した。

\STEP/
4

宣伝・告知を行う

粗品を用意し、広報紙や区社協 SNS 等でイベント開催を周知。

子育て世代のお母さん達の目にも留まるように、**子育て世代が中心となっている SNS でもスタンプラリーを周知**。

\STEP/
5

物品の準備と配布

各喫茶へパンフレットとスタンプを配布。また、喫茶参加者へスタンプラリーの周知を依頼。

パンフレットだけでなく**ポスターも作成**。スタンプラリーのさらなる周知をはかった。

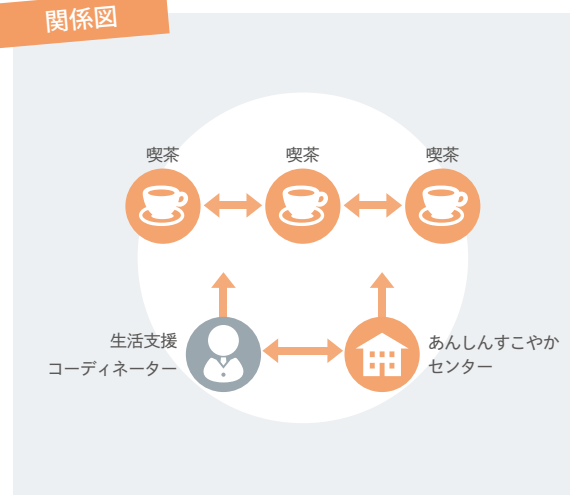
\STEP/
6

スタンプラリーの実施

10月の1ヶ月間限定で「ふれあい喫茶スタンプラリー」を実施。

年間通しての企画ではなく、**あえて「1ヶ月限定」とすることで**、参加者の興味・関心を引くと考えた。

関係図



取り組みの到達点

参加者から「いつも通うふれあい喫茶以外の喫茶に行けるきっかけとなった」という声をいただき、地域の方に区内のふれあい喫茶について知ってもらう機会となった。また、喫茶の活動者同士の交流も生まれた。

今後に向けて

最終的にはスタンプラリー参加者は高齢者だけであり、目的の一つの「居場所の次の担い手の発掘」には至らなかったが、今後若い世代にも興味・関心を持ってもらえるようなやり方や広報の方法を考えていきたい。

生活支援コーディネーターのひとこと

参加者だけでなく、ふれあい喫茶の運営者側からも「楽しかった」という声をいただき、嬉しく思った。今後もより充実した内容にできるように工夫していきたい。

活動事例

05

生活支援・しくみづくり

北区

「農福連携」を活かした
買い物ができる集い場づくり

地域の概要

昭和40年代に開発された住宅街で坂道が多く、公共交通機関はバスのみ。高齢化率は40%を超え、移動が生活課題となっている。

取り組みのきっかけ

近くの食品スーパーが閉店し、買い物や近所の人との交流場所がなくなって高齢者が困っているという声が寄せられたため、対応策を検討するために第2層地域ケア会議を開催した。その会議で、他地区の買い物支援や区内

の農福連携プロジェクト(障がい者支援施設等の利用者による農産物の生産・加工・販売)について紹介したところ、買い物ができる集い場づくりを検討することになった。

※農福連携…区内、10の障がい者支援施設・就労支援事業所が手を組み、「きたベジねっと」として農福連携事業に取り組んでおり、農家から請け負った田畑で農産物の生産や加工・販売を行い、障がい者の就労支援や、担い手不足等農村の課題解決につなげている。

キーワード

- ☑ 農村地域があるという区の特徴を活かした仕組みづくり
- ☑ 買い物を通した住民同士のつながりづくり

歩いて行くことのできる距離に買い物ができる場所をつくりたい！

方向性

- ☑ 他地区の取り組みを自分たちの地域に当てはめて工夫する
- ☑ 買い物に困る地域と販路を拡大したい農福連携プロジェクトをつなぐ

立ち上げのプロセス

全体の流れ

生活支援コーディネーターの視点

\ STEP /
1

他地区の取り組みを紹介

第2層地域ケア会議にて区社協より地域の集い場実施日に合わせ、障がい者施設の方が作った農産物やお菓子の販売会を実施している地区を紹介。生活しやすい地域にする方法を住民の方々と話しあったところ、自分たちの集い場でも販売会をやりたいという声があがった。

新たなことを一から始めるのは難しいため、既存のものを活用しながら実施できそうな取り組みや近隣エリアの取り組みを紹介し、「**私たちにもできそう！**」という気持ちになるよう促した。

\ STEP /
2

住民の意向の確認

集い場運営ボランティア・参加者に対し、あんしんすこやかセンターとともに野菜販売会の実施案を説明し、自分たちの地域で取り入れることができるか検討した。

地域住民のやってみようという気持ちが高まっているうちに具体案が示せるよう、**あんしんすこやかセンターと準備を行った。**

\ STEP /
3

実施に向けての打合せ

地域住民、障がい者施設、あんしんすこやかセンターと野菜販売会実施に向けて広報の方法や販売体制、販売品目、会場レイアウト等について打合せを行った。

スムーズに販売ができるよう役割分担し、また一定の売上げにつなげられるように**販売方法や広報についてもアドバイスを行った。**

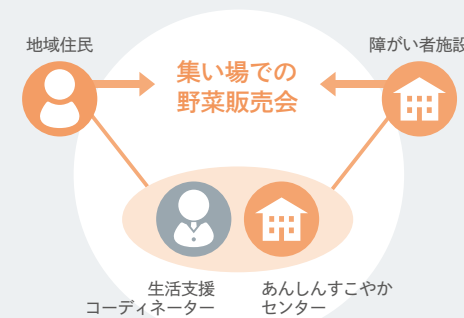
\ STEP /
4

野菜販売会の実施

定例の集い場の閉会後に野菜販売会を実施。終了後、集い場運営ボランティア、障がい者施設の販売スタッフ、あんしんすこやかセンターと反省会を行い、課題や良かった点を共有。

反省会で出された課題を解決できるよう助言等を行い、**運営が軌道に乗るまで継続して支援した。**

関係図



取り組みの到達点

北区産の新鮮野菜は大人気であつという間に完売しており、販売を通じて障がい者の方と地域住民との交流の場にもなっている。また、この取り組みをきっかけに、自分たちも地域で何かしたい！と住民の声があがり、体操の集い場の立ち上げにもつながった。

今後に向けて

利用者が増えるよう、あんしんすこやかセンターとともに自治会等へ広報の協力を働きかけていく。

生活支援コーディネーターのひとこと

買い物に困っているという住民と農福連携事業の販路開拓に困っているという障がい者施設をつなぐことで双方の課題解決につなげることができ、住民に負担をかけずに新たな取り組みを進めることができた。

集合住宅内における生活支援のしくみづくり



地域の概要

公営住宅の建替えの際に、区内様々な地域からの転入者が多く居住することとなった集合住宅。古くからの住民と新しい住民とのコミュニティづくりが課題となっている。

取り組みのきっかけ

もともと住宅内では、自治会長を中心に友愛訪問活動グループやボランティアが積極的に活動している。自治会長は月に数回、カフェや体操などを積極的に開催しており、高齢者のコミュニティの基盤ができつつある状況の中、個人的なつながりや親切心から一時的にゴミ捨ての

お手伝いをしている事例もいくつか見られた。しかし、それはしくみとして整ったものではなかったため、継続的に安定して活用できる状態とすることを目標に、協議体の取り組みとして、あんしんすこやかセンターと共に支援することとした。

キーワード

- ☑ 個人的なつながりや親切心からのお手伝いがある
- ☑ 一部の人に対してのお手伝いに留まっている
- ☑ 友愛訪問ボランティアがしくみづくりに対して理解を示している

みんなが利用できるお手伝いのしくみを作りたい

方向性

- ☑ アンケート調査と聞き取りで、困りごとについての意識調査を行う
- ☑ しくみを住宅内で整備、可視化する
- ☑ 既存の住宅内の関係性は大切にする

立ち上げのプロセス

全体の流れ

\ STEP / 1

住民アンケートの実施

協議体のテーマに取り上げ、あんしんすこやかセンターと住民アンケート調査を行う。結果、ゴミ出しに困る人と、手伝える人もいることが判明した。これを踏まえ、住民に対する報告会を行った。

\ STEP / 2

助成金の活用

区社協の助成金を活用し、ゴミ袋を運ぶ際に使用する台車に、チーム名を大きく記載したシールを貼り、ボランティアの自宅前に設置した。また、チーム名の腕章も作成した。

\ STEP / 3

生活支援のしくみを検討

自治会長とあんしんすこやかセンターとともに準備会を実施し、住宅に合ったゴミ出しのしくみを検討した。まずはゴミ捨てから有償チケット制で開始する方向で決定した。

\ STEP / 4

無料ゴミ捨てキャンペーンの実施

「無料ゴミ捨てキャンペーン」を開催した。ボランティアがチラシを住民に配布したが、当日に忘れてしまう高齢者が多く、数人しか無料券を取りに来なかった。

\ STEP / 5

しくみのスタートへ

しくみの案を再度検討した。有償を無償に変更し、まずは既存のゴミ捨てのしくみを機能させ、住民のペースに合わせて徐々に定着させていく方向で、再スタートを切った。

生活支援コーディネーターの視点

ゴミ出しの課題は地域によって様々である。**モデル地域を設定し**、協議体で助言を受けながら、ひとつの事例研究として掘り下げた。結果報告会は、あんしんすこやかセンターと協働しながら臨んだ。

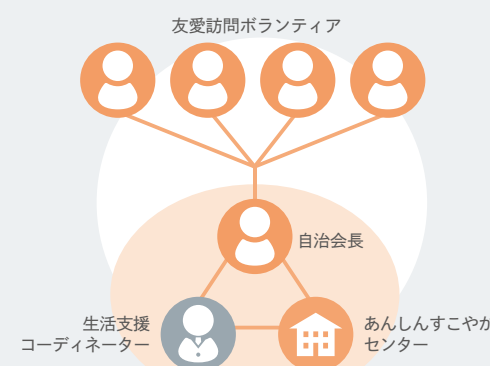
既存のゴミ捨てのお手伝いを見える化して周知することで、**手伝ってほしい人、手伝える人を探り出すことをねらい**とした。

他都市における生活支援のしくみの好事例や要項を提供した。準備会ではこの好事例をベースに様式や要項の案を作成した。

無料のお試しを実施することで、しくみをスタートする周知につながると考え、提案した。また、広報用チラシや無料券を作成した。

再検討の結果、分かりやすく馴染みやすいしくみが必要と判断した上で、**高齢者にとって更に分かりやすい申請書やチラシの新しい様式を作成した。**

関係図



取り組みの到達点

自治会長やボランティア、あんしんすこやかセンターと連携しながら住宅の高齢者と関わることで、住宅の強みやニーズを把握し、それを踏まえてゴミ捨てのしくみの枠組みを組み立てることができた。

今後に向けて

しくみとして定着し、利用者や担い手を増やすことを目指す。まずは掲示、口コミ、居場所での広報や周知を重点的にを行い、必要な時に必要な方が活用できることを目指す。

生活支援コーディネーターのひとこと

住民と同じ目線で意見交換をし、生活支援コーディネーターとして助言やノウハウ提供、課題の分析などの役割を果たすよう心がけている。

地域での生活支援活動をすすめるための事例集作成



地域の概要

垂水区の人口は約22万人で、神戸市全人口の約15%を占めており、高齢者人口は市内で最も多くなっている。また、勾配がある地域が多いため、外出に苦労する高齢者が増えている。

取り組みのきっかけ

以前からケアマネジャー等から「ゴミ出しを手伝ってくれませんか」との問い合わせを受けることがあり、ゴミ出しのためだけにホームヘルパーを依頼することもできるが、時間帯が早いのでヘルパーも見つかりにくいという困りごとを聞いていた。

平成29年度の垂水区地域ケア会議で「高齢者のゴミ出し支援」がテーマになり、そこで出された意見をもとに、平成30年度の垂水区協議体で地域でのゴミ出しを中心とした生活支援サービスを広めるための方策について検討することになった。

キーワード

- ☑ ゴミ出し等、日常のちょっとしたことに困っている高齢者がいる
- ☑ ゴミ出しのためにホームヘルパーを頼んでいる高齢者がいる
- ☑ 機会があれば困っている人の手助けをしたいと思っている人がいる

地域住民による生活支援サービスを広めたい

方向性

- ☑ 行政サービスの問題とは別に考える
- ☑ すでに生活支援サービスを実施している地域団体のノウハウを事例集にまとめる
- ☑ 地域でのちょっとした助け合いが求められていることを広く啓発する

立ち上げのプロセス

全体の流れ

STEP / 1

区地域ケア会議

「高齢者のゴミ出し支援」をテーマに、民生委員・ふれあいのまちづくり協議会役員・介護保険事業者・あんしんすこやかセンター等が話し合った。

STEP / 2

協議体(1回目)

環境局垂水事業所長を招き、ゴミ収集の現状や高齢者のゴミ出しに関する課題を伺った。

STEP / 3

協議体(2回目)

垂水区代表中学校長を招き、中学生のボランティア活動の話聞く。また、実際にゴミ出し等の生活支援をしている地域団体の事例を紹介した。

STEP / 4

事例集作成

「支え合いの仕組みづくり事例集『生活支援をはじめよう!』」と各団体の規約や様式をまとめた「様式集」を作成した。

STEP / 5

生活支援フォーラム開催

38ページ参照

生活支援コーディネーターの視点

区地域ケア会議に限らず「ゴミ出し」が話題になると、①ゴミ収集の時間を遅くする、②ゴミステーションの数を増やす、③自宅前にゴミを出せるようにする、④登校中の学生にゴミを出してもらうなどの意見が多く聞かれる。まずはこれらの「よくある意見」を協議体で掘り下げることにした。

現状で、行政機関ができることとできないことを知ることができた。また、協議体での情報共有を通して、環境局に地域における高齢者のゴミ出しの課題を認識してもらうことができた。

2回の協議体で、上記の「よくある意見」を実現することは容易ではないと分かった。参加者であるふれあいのまちづくり協議会委員長から、「先駆的団体の仕組みや使っている様式などの情報提供があれば立ち上げのハードルが下がる」との意見があり、事例集作成の後押しとなった。

区内で生活支援を実施している4団体を取材し、立ち上げ時の苦労や運営の工夫、やりがいなどを聞き取った。取材を通して、活動立ち上げのノウハウを蓄積することができた。

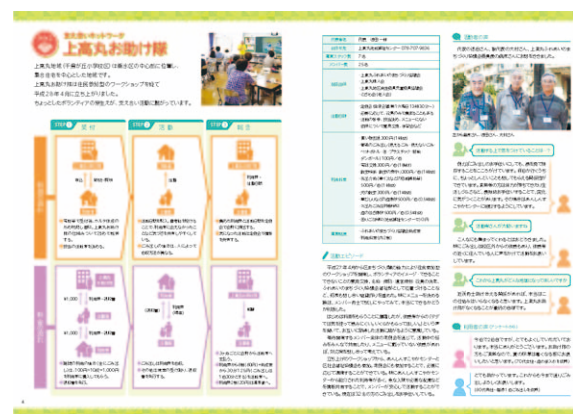
生活支援サービスの啓発のほか、協議体のまとめと事例集の普及を目的にした。

取り組みの到達点

協議体に参加したふれあいのまちづくり協議会で、新たに生活支援活動を立ち上げ予定である。事例集というツールがあることで、地域にアピールしやすくなったとともに、活動のイメージを共有しやすくなった。

今後に向けて

地域で生活支援活動を立ち上げるのは容易なことではないが、諦めずに、繰り返し地域に必要性を説明する。区社協の支援ノウハウを確立し、ふれあいのまちづくり協議会から自治会まで、柔軟に支援していくことが必要である。



生活支援コーディネーターのひとこと

協議体という会議をいかにして有意義に進めるか、どんな事例集を作るか頭を悩ませたが、それが生活支援コーディネーターのスキルアップになった。事例集を作って終わりではなく、実際の活動をどうやって立ち上げるか、地域の方々と一緒に試行錯誤していきたい。

子ども向け認知症啓発プログラム 「キッズ認知症サポーター養成講座」



地域の概要

灘区は南北に長く、北は山間部であり坂が多く、交通手段も少ない。南は主要幹線道路があり、東西の移動はしやすいが、道路を隔てた高齢者の南北の移動は難しい環境となっている。

取り組みのきっかけ

灘区地域ケア会議で「認知症に対する正しい理解と予防」という課題があがった。高齢者だけでなく子育て世代や将来地域の担い手となる子どもたちに、認知症の人やその家族に対する正しい理解を深めることで「認知症の人

にやさしいまちづくり」を目指すため、まずは市社協が運営する児童館で「キッズ認知症サポーター養成講座」に取り組むこととした。

キーワード

- ☑ 認知症の方が地域で増えてきた
- ☑ 認知症の方に対する接し方が分からない
- ☑ 多世代に認知症について知ってもらわないと啓発の意味がない

子ども向けの認知症啓発プログラムをまずは児童館で実施しよう！！

方向性

- ☑ スタッフの確保
- ☑ キャラバン・メイト(※下記詳細)との連絡会実施
- ☑ キャラバン・メイト、児童館との課題の共有

※キャラバン・メイト…認知症サポーターを養成する「認知症サポーター養成講座」の講師。

立ち上げのプロセス

全体の流れ

STEP 1

キャラバン・メイトや専門職が感じる課題

地域ケア会議の課題とあわせて、あんしんすこやかセンター等の職員から、認知症サポーター養成講座を「高齢者以外の世代にも受けて知ってほしい」という意見が出ていた。

STEP 2

協力者を集める

認知症啓発サポートボランティア養成講座を実施し、ボランティアスタッフの確保を行い、キャラバン・メイトにも趣旨を説明し、協力を仰いだ。

STEP 3

関係者のネットワークで

キャラバン・メイト、サポートボランティア(地域住民)の連絡会を開催。「キッズ認知症サポーター養成講座」の理解を得て、子どもたちにとって分かりやすい講座の内容と一緒に検討した。

STEP 4

講座をやってみた

児童館長に開催趣旨と内容を説明し、小学校の夏休みに実施。子どもたちは寸劇やクイズなどを通して認知症について学び、自ら考えを発表したり、楽しみながら理解を深めた。

STEP 5

認知症の人にやさしい人を増やす

小学校の福祉学習の一環として取り組んでいただけるよう区内の小学校校長会で講座の趣旨と成果を説明した。認知症の人や家族への理解を子どもの頃から深める機会を模索していく。

生活支援コーディネーターの視点

将来地域の担い手となる子どもたちに認知症の啓発を行うことにより、帰宅してから配布資料等で親(子育て世代)に伝わると考えた。

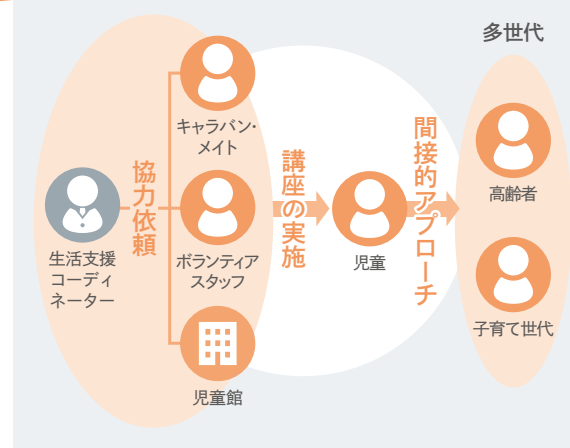
サポートボランティアを養成し、キャラバン・メイトと連携することで、スムーズな講座の運営を行う。

実際にプログラムの構成を話し合い、寸劇やクイズを中心にすることで、講座を受けた子どもたちが理解しやすい内容にした。

夏休みに実施することで、参加者の確保、児童館のイベントの1つとして活用してもらえたと考えた。しかし、児童館だけでは広く啓発が行えないことが課題として見えてきた。

小学校で講座を開催することで、より広く認知症の啓発が行える。また、連携の幅も広がり、今後地域全体での取り組みにもつながると考えられる。

関係図



取り組みの到達点

認知症の啓発活動を行うことで、高齢者に対する思いやりや、認知症の簡単な知識や理解が得られる。また、小学生向けの認知症講座副読本を配布することで、親の目にも触れ、多世代へのアプローチにつながると考えられる。

今後に向けて

小学校で講座が実施できれば、認知症について地域の人たちと考えるきっかけとなり、あんしんすこやかセンターが行っている「認知症高齢者声掛け訓練」等への参加を促すことができる。今後、地域ぐるみでの認知症への取り組みにつなげていきたい。

生活支援コーディネーターのひとこと

生活支援コーディネーターとして、高齢者だけでなく、そこに関わる地域の人(資源)に着目し、直接的なアプローチだけではなく間接的な多世代への啓発に取り組むことで、地域全体で認知症の人にやさしいまちづくりを考えていきたい。

金融機関向け 認知症サポーター養成講座の開催



地域の概要

北神地域は北区の北部に位置し、住宅地域と農村地域で構成されている。オールドニュータウンの高齢化率が高いが、とりわけ農村地域の高齢化率は特に高くなっている。

取り組みのきっかけ

あんしんすこやかセンターに金融機関から認知症サポーター養成講座(オレンジリング研修)の開催問い合わせがあった際に、地域の見守り活動者に向けた認知症サポーター養成講座を案内し、参加していただいた。すべての人が関わる金融機関で認知症の理解が深まることにより、

適切な窓口対応ができ、早期に適切な機関とつながり、認知症の方でも地域に住み続けることができる。支店単位での開催は困難であると考えられたため、北神地域で開催することとなった。

キーワード

- ☑ 認知症を原因とした金融トラブルが増えている
- ☑ 住みなれた地域で暮らし続けるために金融機関との関わりは不可欠

北神地域認知症サポーター養成講座を開催

方向性

- ☑ できるだけ多くの金融機関に参加を呼びかける
- ☑ 地域における協力体制・ネットワークづくり(早期発見のしくみづくり)

立ち上げのプロセス

全体の流れ

\ STEP / 1

関係機関に協力依頼

開催について、あんしんすこやか係とあんしんすこやかセンターに相談するとともに協力を依頼する。

生活支援コーディネーターの視点

区社協単独よりも、協力者を得ることで取り組みに広がりが持てる。

\ STEP / 2

ポイントを絞ってアプローチ

あんしんすこやかセンターを通じて北神地域に多くの店舗を有するJA兵庫六甲に開催の趣旨説明、参加依頼を行う。

実行性を持たせるため、多くの店舗を有する金融機関に協力依頼を行う。農村地域の方にとっては、JA兵庫六甲との取引が多いため、重点的に働きかける。

\ STEP / 3

幅広く講座案内

あんしんすこやかセンター職員とともに北神地域の全金融機関に開催案内のために訪問。

区社協、あんしんすこやかセンターの周知とともに、直接担当者に案内することにより、チラシが埋もれることが無いようにした。

\ STEP / 4

働きかけの継続とニーズキャッチ

参加申し込みがなかった金融機関に再度訪問。

各金融機関の担当者と直接会い、現在のお客様対応でのお困り事や研修の開催状況の聞き取りを行った。単独で認知症研修を開催している金融機関もあることが分かった。

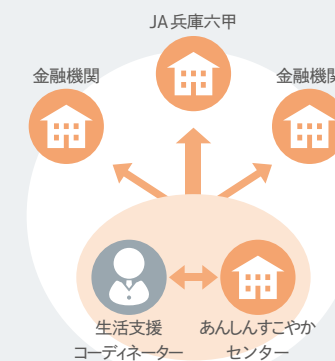
\ STEP / 5

しくみづくりへの第一歩

講座の中であんしんすこやかセンターの役割について説明する時間を設けた。また、金融機関の所在地を担当するあんしんすこやかセンターとの交流会を実施した。

支援者・専門機関がお互いに顔の見える関係を身近な地域の中でつくることにより、早期発見・支援につながるしくみを構築していく。

関係図



取り組みの到達点

参加者からはあんしんすこやかセンターの役割や職員を知ることができ、「良かった」「安心した」との感想をいただいた。顔の見える関係づくりの第一歩として、一定の効果があったと思われる。

今後に向けて

不参加だった金融機関との関係づくり、特に大手銀行との関係づくりを進める。各金融機関も転勤があり、交流会については定期的に開催する必要があると考えられる。

生活支援コーディネーターのひとこと

専門職や専門機関のネットワークづくりを進め、認知症の人も住みやすいまちづくりを目指していきたい。

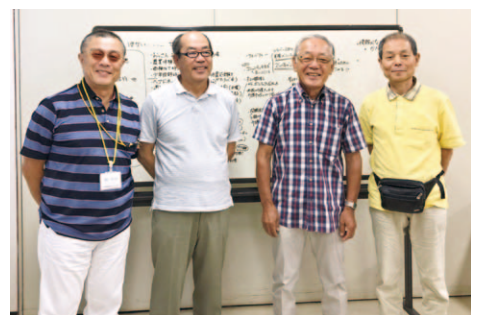
活動事例

10

仲間づくり

西区

シニア世代(特に男性)の地域参加に向けたネットワークづくり



地域の概要

西区は広域で地域性も多様。講座等の受講者が1つのグループをつくって地域拠点をを持った活動をはじめるとは難しく、活動とのマッチングは個々の対応が多い。

取り組みのきっかけ

シニア世代や男性への新たなはたらきかけの必要性は常々感じていた。70歳前後の男性で地域活動に熱心な方々のお話を伺うことが増えていた。その中で、キーマンとなるAさんより「シニア世代の特に男性が、“福祉”や“ボランティア”にいきなり結びつくことは難しい。しかし、

スキルや想いを持った人はたくさんいる。趣味や生きがい活動も含めて楽しく、ゆるくつながり続けられるような場所が欲しい」と伺い、新たな仕組みづくりについて話し合いを始める。

キーワード

☒ 男性の地域参加を促進したい
☒ 講座受講後、活動に直結しなくても何らかのつながりを保ちたい
☒ ボランティアや地域活動に関する情報が欲しい人は多い

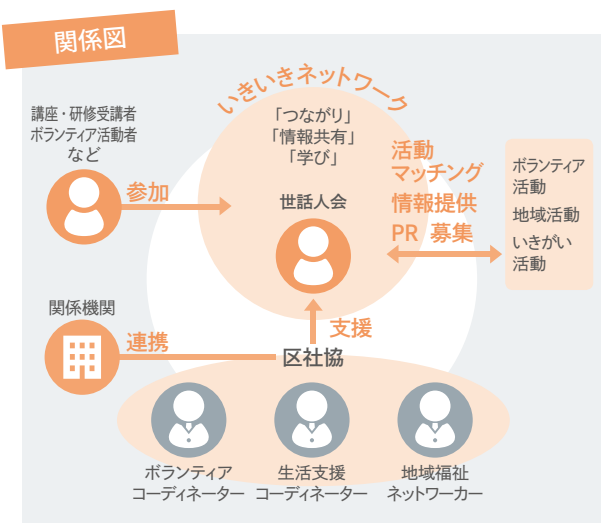
情報や活動をつなぐ、ゆるく楽しいネットワークをつくらう!!

方向性

☒ 企画運営に携われる人を集める
☒ 楽しい企画も取り入れた気軽に参加できる仕組みづくり
☒ 仲間を集める

立ち上げのプロセス

全体の流れ		生活支援コーディネーターの視点
STEP / 1	キーマンAさんの意向を聞く 講座の受講者などが情報を得たり、交流しながら仲間を増やすことで活動者や協力者を増やしていくイメージを図を用いて共有しながら検討を始める。	Aさんの「やりたい」ととことん聞いてみた。その中で、“男性”、“今のシニア世代”の想いを知ることができた。Aさんの想いを聞きながら、現状や区社協としてできる内容をお伝えする。
STEP / 2	世話人会の立ち上げ R1年8月、生活支援・介護予防サポーターのシニア男性6人で、つながりを持って楽しみながら地域参加のきっかけになるようなネットワークづくりを目指す。	世話人会の自己紹介で、それぞれのスキルや特技、関心のあることなどが次々に判明し、可能性が広がる。同時に、「ふれあい喫茶への参加は男性にとってハードルが高い」という生の声に驚く。
STEP / 3	「いきいきネットワーク」誕生 名称や仕組みについて話し合う。発足に向けて交流会を企画。まずは、ボランティアセンターのメール配信システムを活用して情報配信していく。	月1回の世話人会は、毎回、話題が尽きない。男性がおしゃべりできる場が少ないこと、語りたい人がたくさんいることを知る。ボランティア登録しなくてもメール受信できるようになり、ボランティアセンターの啓発にもつながった。
STEP / 4	交流会を開催してPR R1年12月、参加者を広く呼びかけて交流会を開催。健康講座、多様な活動の報告、参加者同士の交流、情報提供を行うとともに、ネットワークのPRとメール登録を啓発。	交流会当日も世話人会のメンバーが実行委員として運営。今後も自主的な企画運営を楽しく続けてもらえるよう、お話の弾む世話会を続けていきたい。
STEP / 5	今後の活動を長期的に計画 「つながり」「情報共有」「学び」を活動の柱に、来年度は仲間を増やすことを目的に企画(交流会・いきいきカフェ・ゼミ・情報収集と発信)をすすめている。	世話会の中では、障がい者や社会的に孤立した若者の支援などにも関心が高まっている。多くの人に情報提供しながら同じ関心事のある人が勉強会を行うなどの発展を期待。



取り組みの到達点

グループや活動の枠を超えて仲間ができ、活動に誘い合ったり情報交換をしたりという、ゆるく楽しいつながりの小さな輪ができた。交流会を機にメール登録された方がボランティアセンターからの募集メールを見て、ボランティア登録や活動につながった。

今後に向けて

仲間が増えて人や情報の行き来が盛んになるよう、新たな仕掛けが必要。参加者が講師になるような継続的な講座や、つどいの場を取材したりPRするような仕組みを検討中。いろいろな人の声が集まり、自主的な動きが進むよう支援していきたい。

生活支援コーディネーターのひとこと

シニア男性の皆さんとガッツリ話をすることで、男性的な捉え方や企画の進め方を体感できた。元気なシニア世代が増える今が地域にとってのチャンスになるよう、柔軟に支援していきたい。

シニア向けはじめての一步ツアー 開催に向けての取り組み



地域の概要

兵庫区では市全体の高齢化率を上回り30.5%、高齢者の単身世帯、高齢夫婦等の世帯率は29%と年々増加傾向にある。また、外出する高齢者とそうでない高齢者の差が見受けられる。

取り組みのきっかけ

区内8か所で行われる第2層地域ケア会議で共通して、外出されない高齢者をどう誘い出すかという課題があげられている。今日行くところを見つけれない、一人では行きづらい、何かのきっかけがあれば出かけられるといった高齢者を一人でも多く地域とつなぐことができないか。

高齢者を支える家族にも、地域のつどい場を知ってもらい、豊かな暮らしにつなぐ支援ができないかを考え、お出かけ先の発見とコミュニティづくりを目標に取り組むこととした。

キーワード

- ☑ 単身高齢者世帯や高齢者夫婦等の世帯が増え、地域との関わりがない世帯も多い
- ☑ 高齢者に限らず、住民は地域の居場所を知る機会やきっかけが少ない
- ☑ 迷惑をかけたくない、健康でいたいと思う高齢者は多い

高齢者向けの「はじめての一步ツアー」を計画し、実施する

方向性

- ☑ あんしんすこやかセンター、あんしんすこやか係、地域の居場所支援者、ボランティアに提案
- ☑ 医療関係者やケアマネジャー、介護サービス事業所などに地域の居場所を知ってもらう
- ☑ 継続して行きたい居場所、気の合う仲間を見つける

立ち上げのプロセス

全体の流れ

\ STEP / 1

企画の提案

あんしんすこやかセンター連絡会で、企画の提案・説明を行う。ツアー先にふさわしい居場所の候補をあげていただくようお願いをする。

\ STEP / 2

ツアー候補先へ相談を行う

あんしんすこやかセンターから提案いただいた地域の居場所に出向き、趣旨の説明と協力をお願いをし、同意を得る。

\ STEP / 3

事前学習会及び実施検討会

講師を招き、目的の確認、ツアーに向けて効果的な実施の仕方、実施に向けての具体的な打合せ、検証までの流れについてアドバイスを受け、取り組む。

\ STEP / 4

年間8か所の日程を決定し チラシの作成及び配布

ケアマネジャー、介護サービス事業所、医師会などにも配架について、協力をお願いをする。

\ STEP / 5

ツアー実施と振り返り

実施の都度、ホームページやFacebookページで報告と次回の案内を掲載。広く広報を行う。全ツアー終了後にあんしんすこやかセンター、居場所の協力団体、ボランティア及び参加者にも呼びかけ、次年度の開催に向け、振り返りを行った。

生活支援コーディネーターの視点

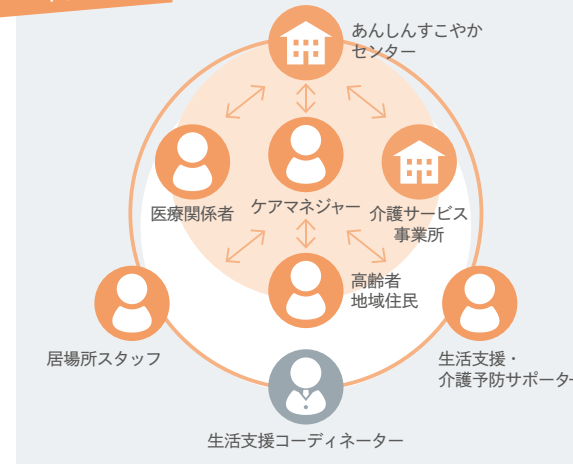
生活支援コーディネーターが、一人で考えるのではなく、あんしんすこやかセンターやあんしんすこやか係にも提案していただきながら組み立てを行うよう心がけた。

講師には趣旨を伝え、打ち合わせを十分に行った。学習会では、居心地の良い居場所について学び、実施に向けて準備した。参加される高齢者に分かるように、スタッフユニフォームや手旗、のぼり旗なども作成した。

全8か所の調整を行い、年間予定を入れたチラシを作成する。広報誌等への掲載も行う。実施前には下見を行い、参加される高齢者の安全を確認した。

ツアー実施中は、参加者にアンケートを取り、振り返りの会で活用できるように準備をした。ホームページやFacebookページの活用は、支援者や高齢者がいる家族などにも見てもらえるよう、掲載を継続して行った。

関係図



取り組みの到達点

延べ参加者は32名。チラシ等を見て参加してくださった方もあったが、あんしんすこやかセンターの声かけや、家族の後押しで参加した方もあった。初めての試みで参加人数は多くはなかったが、地域につどい場があることを知っていただくことはできた。

今後に向けて

今まで居場所デビューができていない方にとって、自ら進んで参加することは難しく、家族や支援者からの声かけが必要であることを感じる。社会参加が介護が必要になるリスクを下げることや、人との交流により、寝たきりや認知症になるリスクが低くなることなど、介護予防と居場所への外出の関係についても広報する。

生活支援コーディネーターのひとこと

日ごろから高齢者と関わりのある方(例えば、ケアマネジャーや介護サービス事業所、医師会や薬剤師会・歯科医師会の方々)との交流を持ち、支援者からの声かけで外出のきっかけにつながるよう広報していきたい。

高齢者への支援の仕組み構築に向けた 支援者用ツールづくり



地域の概要

ショッピング街や駅周辺の利便性からタワーマンションが林立し、H30まで21年連続で人口が増加しているが、近隣住民との交流の機会が少なく、高齢者の孤立が課題。

取り組みのきっかけ

第1層地域ケア会議で「社会資源情報の整理と活用」が課題としてあげられた。中央区内全域の集い場情報としてまとめたものがなく、「社会資源情報の見える化」という

課題に対応することを目的として、区社協が協議体機能を持つ会議「実務者会」を開催して解決策を話し合うことになった。

キーワード

- ☑ どこでどんな集い場が行われているか、まとまった情報がない
- ☑ 集い場主催者の声「高齢者の相談を受けた際に困る」
- ☑ 多様な主体が運営する集い場や、高齢者のお困りごとに対応した関係機関が存在する

社会資源情報を「見える化」して活用したい

方向性

- ☑ 情報の活用方法を検討する
- ☑ 誰がどのような情報を必要としているかを整理する
- ☑ 情報を「見える化」して活用し、支え合いの仕組みをつくる

立ち上げのプロセス

全体の流れ

STEP 1

話し合いの委員を選定

実務レベルで話し合いを進めるための委員を、地域、社会福祉法人、介護支援事業所、NPO、在宅医療・介護連携支援センターなどから選定した。

STEP 2

事例を共有

すでに取り組みがされている、あんしんすこやかセンターや他都市による社会資源情報を視覚化した事例を幅広く紹介した。

STEP 3

取り組み方針を決定

情報をどう活用し、必要としている方にどのように届けるかについて意見交換した結果、支援者用ツールを通じて情報を必要とする高齢者に届ける仕組みをつくり、地域の集い場が相談に対応できる支え合いまちづくりを目指すことになった。

STEP 4

情報収集

アンケートやヒアリング、あんしんすこやかセンターからの情報提供、区社協のネットワークを通じて情報収集し、高齢者が参加できる「集い場情報」と、既存の制度やサービス・関係機関など「相談つなぎ先情報」をまとめた。

STEP 5

支援者用ツールの配付、活用へ

協議に参加いただいた委員や、第1層地域ケア会議の委員から、支援者用ツール案に対して意見をいただき、発行。地域の支援者や関係機関、集い場の担い手の方々に配付した。

生活支援コーディネーターの視点

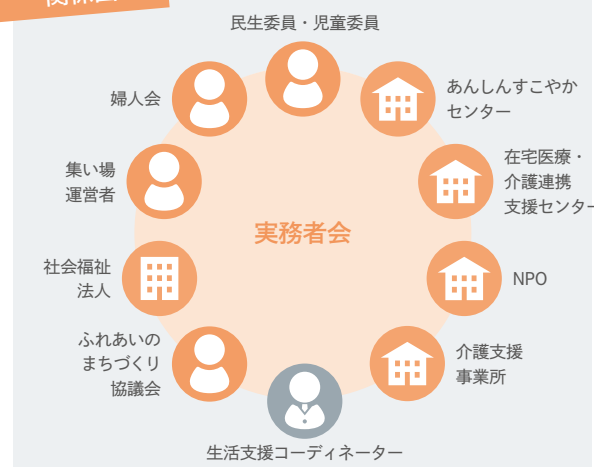
現場の声を拾うために、地域からは集い場を実際に運営している方も選定した。また、地域支援を行なう多様な専門職を選定した。協議を円滑に進めるために委員を10名とした。

単なる集い場マップづくりの協議に止めないよう、情報を視覚化することによる新たな集い場づくりや、支援者を通じた情報提供など、活用に重きを置いて事例を紹介した。

集い場を運営する委員から、高齢者との関わりの中で必要とされている情報について意見をいただき、「相談されたときにつなぎ先が分かる情報」の必要性が確認できた。

単に情報収集やツール作りを進めるのではなく、集い場の担い手に対するヒアリングで集い場の実態把握を行った。

関係図



取り組みの到達点

既存情報を区として集約し、支援者で共有することができた。また集い場やつなぎ先情報の実態把握を通じ、区社協と関係機関とのつながりの構築及び情報をデータベースとして蓄積していく必要性を認識することができた。

今後に向けて

情報を得る手段に加えて、地域分析にも活用いただけるよう広報するとともに、情報の更新と共有がしやすいようデータベース化し、公開してほしいというニーズへの対応を検討する。

生活支援コーディネーターのひとこと

支援者用ツールを作ることで支援者が高齢者に適切な情報を提供できる体制づくりに寄与したいとの思いで取り組んだ。高齢者のふとしたお困りごとを地域の集い場が拾って関係機関につなぐような、集い場が身近な相談拠点となる仕組みをつくっていきたい。

体操で地域まるごと元気に！ ～多職種連携による地域支援～



地域の概要

西区は広域で地域性も多様。公共交通機関での移動は困難。身近な地域の中に自治会館や集会所などの会場があることが多い。

取り組みのきっかけ

地域では、身近な地域で体操を教えてもらい介護予防に組みたいというニーズが潜在的にあった。しかし、効果を実感できる体操を自主的に行うことが難しい、講師を呼ぶと講師料が壁になりハードルが上がる、という課題があった。リハビリ専門職(理学療法士、言語聴覚士、

作業療法士)は、自分たちが見ていない自宅や地域での暮らしが介護予防には大切だと実感され、自分たちのスキルが地域で役立てるはずだが方法が分からない、という葛藤があった。リハビリ専門職が生活支援コーディネーターに相談してくださったことがきっかけとなる。

キーワード

- ☑ 地域で介護予防効果のある体操に取り組みたい
- ☑ 継続した活動をしたいが講師料が壁になっている
- ☑ 支援者がニーズを聞いても提供できる体操等のメニューがない

体操プログラムを多職種で考案してコミュニティ支援をすすめよう！

方向性

- ☑ 地域住民の負担が少なく、取り組みやすいプログラムづくり
- ☑ 支援者が連携し、継続して支援できる仕組みづくり
- ☑ 行政の施策として地域リハビリテーションをすすめてもらいたい

立ち上げのプロセス

全体の流れ

STEP / 1

あんしんすこやかセンターへの協力要請

総合事業で地域リハビリテーションが打ち出されたことを機にリハビリ専門職の地域支援に対する相談を受ける。区とあんしんすこやかセンターへの説明で同意を得て検討を始める。

STEP / 2

ワーキンググループで検討

リハビリ専門職、あんしんすこやかセンター有志とともに、「いきいき百歳体操」を使ったプログラムづくりを検討。各支援者の役割分担や地域への説明の仕方などを具体的に検討。

STEP / 3

「いき百」モデル地区で支援スタート

週1回自主的に活動していただき、開始時、3ヶ月(現在はなし)・6ヶ月・1年後に支援者が訪問して体力測定や体操指導等を行うプログラムとしてモデル的にH27は6グループで開始。

STEP / 4

区内全域で支援スタート

いきいき百歳体操支援プログラムとして要望のある地域で多職種が連携して立ち上げていく。現在35グループが活動中。(H27：6グループ、H28：8グループ、H29：6グループ、H30：6グループ、R1：9グループ)

STEP / 5

行政(区)の支援プログラムとしてスタート

H29年度に区を含めた4者連携で支援するため内容を再検討。現在は、自主グループの活動支援として区の事業の1つに位置づけられ、体力測定時に区の保健師も同行して支援している。

生活支援コーディネーターの視点

潜在化していた体操のニーズに対する支援につながると実感し、地域ニーズをお伝えしながら支援者の「できる」を整理していく。**関係者の役割やメリットを明確にした。**

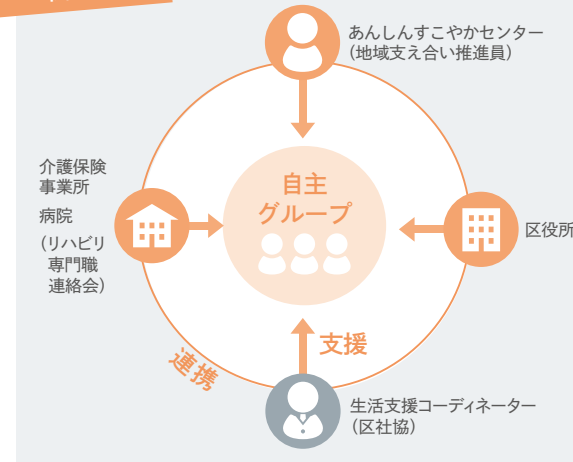
体操の啓発ではなく、あくまで**コミュニティづくりを目的とした地域支援のためのツールであることを常に意識して共有しながら支援プログラムを作成。**

あんしんすこやかセンター、区と経過を随時共有し、支援者が共通認識を持って支援できるよう、また支援者が地域でツールとして活用しやすいよう**パッケージ化。**

週1回の活動が継続できるか不安もあったが、地域で心身の健康につながる効果を実感され、新たな仲間と楽しく続けてくださっていること、また長期の支援により、直に地域の感想を聞けることが**支援者のやりがいにつながった。**

リハビリ専門職は地域貢献のボランティア活動となっている。今後も所属事業所の理解と協力を得るためにも**区との連携は大きな意味がある。**協力事業所へ区から感謝状が贈呈され、事業所内の理解を得る一助になった。

関係図



取り組みの到達点

これまでのつどいとは違った層の参加もあり、男性も多い。全グループが活動を継続しており、茶話会をプラスするなど取り組みが発展しているグループもある。また、これを機に支援者間の連携がしやすくなった。事業所や専門職の地域貢献のきっかけとなり、地域の様々な場面で活躍していただいている。

今後に向けて

地域のモチベーションを維持する取り組みを企画。交流会など他グループの取り組みからヒントをもらえるような機会も検討。リハビリ専門職の派遣について行政の事業化を働きかける。

生活支援コーディネーターのひとこと

多職種が協働することで広い視野で支援ができると実感した。今あるものやできることを持ち寄り、それぞれの専門性や役割を活かした仕組みづくりを様々な場面で大切にしたい。

ふれあい給食会活動の取り組み



ふれあい給食会活動の概要

地域住民により結成されたボランティアグループにより、ひとりぐらし高齢者等を対象に、地域福祉センター等を活用して定期的に給食会を開催している。

昭和54年頃から先駆的な活動が始まり、昭和55年より市社協による助成が実施され、民生委員を中心としたグループが増加した。

平成8年からは区社協事業へ移行し、現在では全市で260グループ(※令和元年12月現在)が高齢者の閉じこもり防止や交流・生きがいを目的に活動している。



長田区

取り組み内容

▶ 参加者や活動者の声を聞く

区内33ヶ所の給食会へ出向いて、参加者や活動者より活動の効果や課題を把握。参加者からは毎月の給食会を心待ちにしているという声が聞かれる一方、活動者からは担い手不足やイベントのマンネリ化等の課題について声があがった。

▶ 参加者や活動者の声を形に

ふれあい給食会でのイベントの1つとして、歯科医師会による「口腔ケア講習」実施に向けた調整を行う。

活動状況を広く発信するために、区社協のホームページに「長田もぐブログ」として各給食会の様子を紹介する。



「長田もぐブログ」
オリジナル
キャラクター

▶ 活動の継続と活性化

活動者からは、「ブログ見たよ。今度はうちの給食会に来て」、地域住民からは「給食会のブログを見たんだけど、私の家の近くにも給食会があるのかしら？」などの声をいただく。

生活支援コーディネーターの視点

参加者や活動者の声に耳を傾けることが重要。給食会は、高齢者にとって閉じこもり予防や元気になる場となっていることが分かった。また、給食会の共通した課題も見えてきた。

把握した課題について、生活支援コーディネーターだけで考えるのではなく、区社協内や他機関とも一緒に取り組むことで、それぞれの強みを活かした「win-winの関係」を築くことができた。

多くの人に給食会活動の取り組みを知ってもらうために、これまでと異なる方法で発信した。

活動者の声を聞いて発信することで、活動者のモチベーションアップや給食会の内容を工夫するきっかけとなり、活動の継続と活性化につながっている。

取り組みの到達点

参加者・活動者との交流の中で活動の課題を把握し、ブログといった新たな方法による発信を通じて活動の活性化に貢献することができた。

今後に向けて

担い手不足は給食会共通の課題ではあるが、気軽に情報を得られるコンテンツ(ブログ)を使い、活動者にスポットを当てることによって、地域活動の継続や活性化、参加を促していく。

生活支援コーディネーターのひとこと

給食会が「楽しく癒され、元気になる場」として継続するよう、地域の実情や課題を把握し、ブログを通じた発信などで後方支援していきたい。



友愛訪問活動の取り組み



友愛訪問活動の概要

ひとりぐらし高齢者や高齢者のみの世帯等を対象に、週1回程度ボランティアが訪問して、安否確認や話し相手、相談等を行っている。

昭和45年に民生委員の社会福祉モニター活動として、当時の単身高齢者を対象に「ひとりぐらし老人実態調査」を実施したことを契機として単身高齢者の見守り活動の必要性が唱えられ、民生委員活動の一環として、友愛訪問活動が始められた。

昭和53年には市社協事業として民生委員を中心に、地域ボランティアの組織化を図り、友愛訪問グループを結成した。平成8年からは区社協事業へ移行、現在では全市で1,296の友愛訪問グループ(※令和元年12月現在)が活動しており、高齢者が地域で安心し



て暮らし続けるための一端を担っている。

須磨区

取り組み内容

▶ 民生委員からの相談

民生委員から友愛訪問の活動方法や報告書の作成について説明して欲しいと依頼があり、話を聞く中で活動者の高齢化や担い手不足の悩みについて相談があった。

▶ 友愛訪問活動の現状把握

積極的に区内各地区の友愛訪問グループや地区民生委員児童委員協議会の定例会に出席し、あんしんすこやかセンターとも情報共有することで友愛訪問の活動状況や課題、地域の実情の聞き取りを行った。

▶ 活動者への説明会の実施

近隣住民だからこそ高齢者の小さな変化に気づき、早期支援につながることや他の地域での取り組みを紹介しながら地域の状況に合わせて説明を行った。

▶ 活動者が主体的に考える場をセッティング

活動者同士で話し合う場を設けることで、自らの活動を見直し、活動に対する共通認識を持つことができ、友愛訪問活動を継続する意欲につながった。

生活支援コーディネーターの視点

活動者の高齢化や担い手不足はどの地域も共通の課題であった。活動者が自ら活動方法について見直して意欲を高め、活動を継続するために、**具体的な協議を重ねることが重要**である。

まずは**地域の実情や課題を実際に自分の目で確かめ、各地域の活動者から直接話を聞く**ことで地域の活動者との信頼関係を築いていく。

地域によって友愛訪問グループの成り立ちや活動方法などが違うので画一的な説明はできない。どれだけ、**その地域に合わせた説明**を行うことができるかがミソとなる。

課題はすぐには解決できない。**課題解決に向けて活動者と一緒に考えていく**こと、活動者同士が話し合い、その地域に合った方法を選ぶことができるよう支援することが「つなぎ役」である生活支援コーディネーターの重要な役割である。



取り組みの到達点

23地区の民生委員児童委員協議会の内、8地区、133友愛訪問グループの内、40グループに説明を行った。(令和2年2月現在)説明会での意見交換の中で新たな気づきもあり、友愛訪問ボランティアにとって今後の活動に活かすことができる機会となった。

今後に向けて

毎月、地区の民生委員の会長から活動報告書提出時に高齢者の見守り状況等を聞き取っているが、より地域の現状把握をするために活動者同士の交流会や意見交換会の開催を検討中である。

生活支援コーディネーターのひとこと

今後、高齢化する活動者たちが活動を継続できるよう、活動状況を視覚化して、担い手づくりや新たな見守りの形について活動者とともに考えていきたい。また、活動者の思いに寄り添うことを大切にしながら意見を交わしていきたい。

兵庫区

取り組み内容

▶ 多職種連携

阪神・淡路大震災時に立ち上がったボランティアもかなり高齢化し、解散するグループが多くなってきたことを区社協内で共有したところ、子育てコーディネーターから地域で子育て活動をする若いママの存在について紹介してもらい、職種の垣根を越えて連携し、取り組むこととなった。

▶ 若いママへのアプローチ

ママたちが集まる場に子育てコーディネーターと出向き、まずは活動について知ってもらうために説明をさせてもらう。

▶ 地域とのすり合わせ

友愛訪問グループが少なく、必要とされている地域の民生委員児童委員の会長や担当民生委員へ地域の状況の再確認やボランティアグループの受け入れについて相談を行う。

▶ 友愛訪問グループの結成と活動に向けての打ち合わせと学習

若いママの友愛訪問活動への気持ちもまとまり、グループを結成することになった。活動を始めるにあたって、地域の民生委員、あんしんすこやかセンターとの顔合わせ、勉強会を実施。初めての訪問は、民生委員と一緒にいき、対象の高齢者に挨拶をした。子どもたちも同行訪問し、高齢者からはとても喜んでいただいている。

生活支援コーディネーターの視点

一人で抱え込まず、困りごとを区社協内で話し合える環境が必要。話し合うことで、ヒントや思いもつかなかった答えに導かれ、結果につながる。

職場(区社協)の強みを活かして、チームで動くことがポイント。アプローチする先とつながりのある職員は、強い味方。アプローチするために一緒に行動する。

地域を大切に行動することが必要と考えた。地域の方々の考えをよく聞き、相談をしながら焦らず進めていくことが成功につながる。この時もすんなりと運んだわけではなく、紆余曲折を経て、現在の結果に結びついている。

結成後のグループや地域へのフォローは大切。グループ結成時の学習会や顔合わせは重要。また、当初は活動後のフォローも心がけた。はじめての活動や受け入れはお互い不安があることから、活動が軌道に乗るまで支援を行うよう心がけた。

取り組みの到達点

若いママさんによる友愛訪問グループの結成と継続的な活動につながった。現在活躍中の友愛訪問グループの活動支援を行うと同時に、“友愛訪問”というワードを地域の方々に知っていただき、若い世代にも周知していく。

今後に向けて

現在は自立した活動をしていただいている。第1号ママさん友愛訪問グループに続くグループが結成できるよう応援していきたい。

生活支援コーディネーターのひとこと

生活支援コーディネーター一人ではできないこと、考えつかないことでも、常に情報や課題を共有しておくことでつながる支援がある。今後も何気ない会話や気づきも大切にして、いつでもチャンスがあれば情報を引き出せるよう努めていきたい。



西区

取り組み内容

▶ ふれあい喫茶の立ち上げ支援

もともと仲の良い女性グループでの立ち上げで、チームワークよくスタートする。ふれあい喫茶のお茶出し等が落ち着いた時間にキッチンで行われるボランティアだけのお茶会(キッチン会議)が印象的。

▶ 民生委員へのヒアリングと提案

日常的に通らないエリアや訪問を希望されない高齢者の見守り等に民生委員が難しさを感じておられた。生活支援コーディネーターから友愛訪問について説明し提案。あんしんすこやかセンターとも状況を共有し、支援方法について検討。

▶ ふれあい喫茶ボランティアへの投げかけ

ボランティアの皆さんに民生委員の活動について知っていた、今の活動をベースにした見守り活動について提案。前向きに捉えていただき、活動に関する具体的な説明を経て活動を開始。

▶ 友愛訪問活動として見守りのスタート

ふれあい喫茶のキッチン会議が見守り活動の情報交換の場となり、民生委員へ驚くほどの多くの情報が集まるようになった。グループ活動のために助成金も活用していただいてふれあい喫茶の充実も図る。

生活支援コーディネーターの視点

地域性とボランティアの皆さんのチームワークに注目！キッチン会議に参加し、地域性などについて教えていただく。

民生委員の見守り活動の大変さを改めて感じる。“当日会う”、“事前のお誘い”、“来られなかった気になる方への声かけ”、“友人から情報を得る”、“新たな方をふれあい喫茶に誘う”等というふれあい喫茶の活動をベースに見守り機能を拡充することを提案。

ボランティアの皆さんが、日頃から住民として近隣の方のことを気にかけて見守りをされていることが判明。友愛訪問活動として民生委員と連携できたことで、個人的な気遣いが地域の見守り活動となった。

隣近所だからこそできる見守り活動があることを実感した。民生委員の負担軽減になるだけでなく、住民にとっては困った時に相談する先が明確になり、地域で暮らす安心につながったと感じる。また、参加されている高齢者から得られる情報もあるので、人が集うだけでなく、情報の集まる場として機能が充実した。

取り組みの到達点

民生委員の活動に対する協力者が増え、地域の情報が民生委員に集まる仕組みができた。また、つどいの場へ専門職が訪問することで、地域と関係機関との距離が近くなり、相談しやすい、情報の届きやすい関係が築けた。

今後に向けて

新たな参加者を増やすため、希望者に向けて自治会館2階の部屋でゲームや運動を行うことも検討されており、今後も関係機関が連携して支援を継続したい。また、高齢者からサークル活動等の新たな要望が出ることも期待したい。

生活支援コーディネーターのひとこと

“つどいの場が身近な地域にあること”、“地域に見守りの目が増えること”、“民生委員や関係機関とつながること”、“相談する先を身近に感じる”が良い循環になることを目の当たりにした。このような活動が増えるよう支援していきたい。



フォーラム・サミットの実施

兵庫区

男の居場所サミット

兵庫区のあちこちで活動が広がってきている「居場所」！今回は男性の居場所や居場所で活躍されている男性に注目！このような活動の広がりを後押しするため、兵庫区社会福祉協議会では実践交流と情報交換の場として“男の居場所サミット”を興味のある男性や、一緒に後押ししたい女性ならどなたでもご参加いただける形で実施した。

活動発表では、男性が出かけたいと思う先はどんなところだろうか、やりがいや活躍できる場が必要なのではないだろうかなど、ヒントになるキーワードも多く出され、次への取り組みにつなぐことができた。

▶ 第1部：居場所実践者による活動発表（兵庫区2団体、他区2団体）

〈講師〉mottoひょうご 事務局長 栗木 剛氏

▶ 第2部：参加者全員での情報交換会



垂水区

支え合いを広げよう！生活支援フォーラム

地域住民が主体となったゴミ出しを中心とした生活支援サービスを広げるため、神戸学院大学の橋本力先生をコーディネーターに招き、垂水区内で生活支援サービスを実施している上高丸お助け隊、きずなの会、霞ヶ丘ふれあいのまちづくり協議会、NPO輝かすみが丘の4団体の事例紹介を行った。地域の活動者が68名参加され、「各地域の取り組みが聞けて参考になった」「活動者の話に説得力があった」「ゴミ出しは地域で取り組まないといけない問題だと思った」などの感想が寄せられた。

また、フォーラムに合わせて、活動立ち上げのノウハウを集めた冊子「生活支援をはじめよう」を作成、配布した。



兵庫区

兵庫区居場所サミット

兵庫区にある居場所の活動者76名とあんしんすこやかセンター職員8名、区社協スタッフ10名が一堂に会し、サミットを開催した。

サミット前半は、神戸親和女子大学教授 菊池信子氏をコーディネーターに招き、事例発表会を行った。地域の住民が互いの健康のためにやっている体操の会のメンバーからは活動が続けるコツを、地域の医師を中心に集まった男性だけのグループからは食事会と医学講話を楽しんでいる様子を、看護師を中心としたNPO法人からは、月曜から金曜の間、毎日オープンする、健康についても相談できる井戸端カフェの様子とその役割について発表していただき、異なる3つの取り組みの良いところや課題を共有することができた。

サミット後半は、あんしんすこやかセンターごとにグループワークを行い、参加者全員で互いの居場所の情報を交換しながらマッピングしたり、居心地の良い居場所づくりのコツなどを共有したりする取り組みを行った。



西区

ご近所支え合いサミット

平成27年度に、介護保険制度の中に位置づけられた「協議体」についての啓発を目的に開催したのがはじまり。その後も住民主体で支え合いの地域づくりを行っていくことの重要性や可能性についてご理解いただき、地域づくりの取り組みがさらにすすむことを目指して、講師による講演と区内の特徴的な活動をメインに区外の活動紹介なども実施している。



	開催日	テーマ
第1回	平成27年12月24日(木)	介護保険の改正と「協議体」について
第2回	平成29年2月1日(水)	交通弱者の移送支援サービスについて考える
第3回	平成30年2月14日(水)	これから地域に求められていること
第4回	平成31年1月28日(月)	地域豊饒化～まずは自分から～
第5回	令和2年2月5日(水)	支え合いのまちづくりって？

神戸市・各区社会福祉協議会 一覧

社協名	所在地	電話 FAX
東灘区社会福祉協議会	神戸市東灘区住吉東町5丁目2-1 東灘区役所内	078-841-4131 078-841-7999
灘区社会福祉協議会	神戸市灘区桜口町4丁目2-1 灘区役所内	078-843-7001 078-843-7077
中央区社会福祉協議会	神戸市中央区雲井通5丁目1-1 中央区役所内	078-232-4411 078-232-1244
兵庫区社会福祉協議会	神戸市兵庫区荒田町1丁目21-1 兵庫区役所内	078-511-2111 078-574-5771
北区社会福祉協議会	神戸市北区鈴蘭台北町1丁目9-1 北区役所内	078-593-1111 078-593-9822
北区社会福祉協議会 北神事務所	神戸市北区藤原台中町1丁目2-1 北神中央ビル(北神区役所)内	078-981-5377 078-940-5444
長田区社会福祉協議会	神戸市長田区北町3丁目4-3 長田区役所内	078-579-2311 078-574-2427
須磨区社会福祉協議会	神戸市須磨区大黒町4丁目1-1 須磨区役所内	078-731-4341 078-733-2533
垂水区社会福祉協議会	神戸市垂水区日向1丁目5-1 垂水区役所内	078-708-5151 078-709-1332
西区社会福祉協議会	神戸市西区玉津町小山180-3 西区役所内	078-929-0001 078-924-3170
神戸市社会福祉協議会	神戸市中央区磯上通3丁目1-32 こうべ市民福祉交流センター内	078-271-5317 078-271-5366

第1層生活支援コーディネーター活動事例集

発行日 令和2年3月

発行 社会福祉法人 神戸市社会福祉協議会

〒651-0086 神戸市中央区磯上通3丁目1-32
こうべ市民福祉交流センター

TEL：078-271-5317 FAX：078-271-5366

ホームページ：https://www.with-kobe.or.jp/